第 95 回国医節 第 17 回台北国際中医薬学術論壇 レポート

日本中医薬学会 評議員、広胖堂はりきゅう治療院 MATAHARI
東北大学大学院医学系研究科 漢方・統合医療学共同研究講座
神谷 哲治

2025 年 3 月 15 日、16 日に台北中医師公会主催のもと第 95 屆國醫節第 17 屆台北國際中醫藥學術論壇（17th Taipei Traditional Chinese Medicine International Forum）が開催された。毎年恒例となっているこのイベントには世界から沢山の中医学に携わる方々が参加される。今年は日本以外には韓国、アメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、シンガポール、マレーシア、ブラジルそれにヨーロッパからの参加もあり海外からの参加だけでも 200 名を超えていた、それに加えて台湾だけでも 2000 名を超える参加があり大変盛大な会となった。来賓では毎年行政から大臣クラスが参加されていたのだが今年は行政のトップである頼清徳総統が直接会場までお越しになったのには驚いた。また頼総統の演説の中で自分が COVID-19 に感染した時には「台湾清冠一号（漢方薬）」のおかげで症状が落ち着いたと話していたことで漢方薬を高く評価していることが伺えた。

今年の大会テーマは「中医実証與全球化（Evidence & Globalization of TCM）」であった。去年に続き伝統医学に AI とビッグデータを融合させようという意図が強く感じられた。そのため AI とビッグデータのセッションにおける発表が一際目立って多い印象であった。他に鍼灸分野では董氏奇穴や頭皮鍼などの発表があったが他にはここ数年、鍼刀の発表が増えてきている印象がある。今回の訪台ではこのような交流から生まれた友人のクリニックを訪問する事が出来た。日本でもとても有名になった朱氏頭皮鍼専門のクリニックである。私自身も頭皮鍼を多用していることもあって、とても有意義な情報交換できた。また以前参加した董氏奇穴のセミナーで知り合った鍾政哲(Michael Chung)先生とも情報交換ができた。この様に世界各地から中医の仲間が集う会に参加することで沢山の先生方と交流できるのは本当に有意義である。そのため毎年参加しているのである。最後にいつも熱心にもてなしてくださる台北中医師公会の理事の先生方には心より感謝申し上げたい。

広胖堂はりきゅう治療院 MATAHARI
神谷 美香

2025 年 3 月 15 日及び 16 日、台北市台大医院国際会議センターにて開催された第 17 回台北国際中医薬学術論壇（併催：第 95 回国医節）に、台北市中医師公会との学術交流協定に基づき参加しました。本大会は、世界 13 か国から伝統医薬学に関連する代表者や専門家を含む約 2,000 名が参加する大規模な学術集会であった。

主催団体である台北市中医師公会のご厚意により、大会の開幕式と歓迎パーティーに出席する機会を得た。開幕式には頼清徳総統がご臨席され、台湾政府が中医学に対して深い関心と支援を示していることが明確に示された。また、本大会の開催は台湾の主要メディアで大きく報道されており、社会的な注目度の高さが窺えた。

本大会の重要な背景として、台湾も日本と同様に超高齢社会に突入した現状がある。高齢者に対する良質なケアの提供は喫緊の課題であり、慢性疾患、認知症、高齢医療などの分野において強みを持つ中

医学の活用が、その解決策の一つとして重要な位置づけとなっている。長期介護政策における中医学の役割深化は、台北市中医師公会が重点的に推進する政策であり、行政との連携を通じてこの課題に取り組む姿勢は、今後の日本の医療政策を考える上でも示唆に富むものであった。

本論壇では、世界各地の中医学専門家や学者による講演を聴講し、最新の研究動向や臨床における知見に触れることができた。多様な視点からの発表は、自身の知識を深める貴重な機会となった。

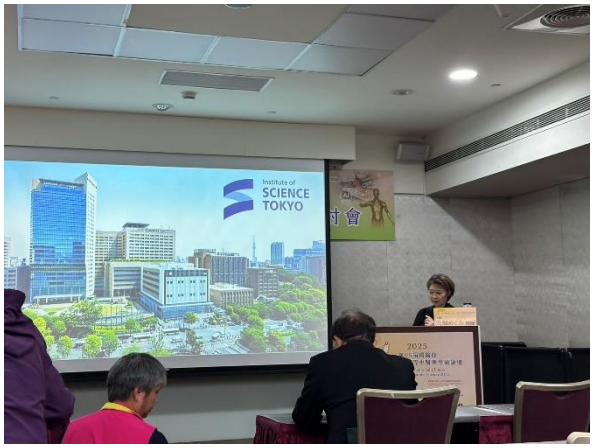
本学術論壇への参加は、国際的な中医薬学の動向を把握するとともに、超高齢社会における中医学の可能性を再認識する上で非常に有意義な経験となった。ご招待いただいた台北市中医師公会に、改めて深甚なる感謝の意を表する。

日本中医薬学会 理事、医療法人社団宏洋会 清水内科外科医院
清水 雅行

3 月 15 日・16 日に開催された台北中医師公会主催の第 17 回台北国際中医薬学術論壇（17th Taipei Traditional Chinese Medicine International Forum）に、本学会訪台団の一員として参加した。今回は平馬直樹会長を団長に、医師 4 名、鍼灸師 6 名の計 10 名での参加となり、例年よりも少人数であった。天候は雨が続き、3 月の台湾としては珍しく、気温は 10℃台前半と寒い日が続いた。しかし、コロナ禍収束後とあって、参加国および各国の参加者は大幅に増加し、開会式には頼清徳台湾総統が来場し祝辞を述べるなど、熱気を帯び盛大に開催された。

本学会からは、日本医科大学名誉教授の高橋秀実先生、東京科学大学（旧東京医科歯科大学）病院麻酔蘇生ペインクリニック科の大畑めぐみ先生が講演を行った。

高橋先生は今回初めて参加されたが、これまでの微生物学・免疫学分野でのご研究および附属病院東洋医学科部長としてのご経験を踏まえ、「漢方薬の現代免疫学的な視点に立脚した真の作用機序」という演題で特別講演を行った。煎じること、すなわち熱性抽出法によって得られる生薬の有効成分は蛋白質ではなく、水溶性脂質あるいは（糖）脂質である。従来、免疫活性化物質は蛋白質であるとされてきたが、（糖）脂質を認識応答する T 細胞の存在が明らかになったことを受け、自身の研究を進めてこられた。その結果、γ1δ1 型 γδT 細胞が、陳皮や枸杞子などの生薬中に含まれる糖化フラボノイド（ヘスペリジンやリナリン）によって活性化され、HIV-1 などのウイルス増殖を抑制することを明らかにした研究成果を発表された。これらの成果をもとに、（糖）脂質に反応する γδT 細胞群および NK 細胞などの自然免疫系は「衛気」、蛋白抗原により活性化される獲得免疫系は「営気」に相当するとの説を紹介された。

大畑先生は 2 回目の参加であり、今回は東京科学大学病院における、文部科学省が主導し全国 11 の拠点大学病院で実施されているがん治療に関わる全ての職種を対象とした「がんプロフェッショナル養成プラン」での経験を基に、「中医薬臨床研究と新知見検討会」のセッションで「がん治療における多職種連携教育プログラムへの鍼灸師登録の試み」という演題で発表を行った。現在、日本では鍼灸治療は医療類似行為とされ、医師の同意書に基づく場合のみ保険診療として提供されている。しかし、がん診療の現場ではサバイバーの増加に伴い、がんの進行による症状や治療の副作用に対し、いかに補完代替医療として医師と鍼灸師が協力体制を構築できるかが課題となっている。東京科学大学病院では、このプログラムに鍼灸師が半数近く登録し受講が可能となっており、今後がん治療の分野における鍼灸師の活躍につながることが期待される。

今回の学術論壇で注目されたのは、AI およびビッグデータ分析関連の演題が非常に増加し、1 会場が終日このセッションに割り当てられていたことである。中医薬学の分野においても、これらの研究応用がさらに進んでいくことが予想され、本学会としてもその動向を注視していく必要があると感じた。